

『ヘンリー二世』 研究

—典型的物語を構築するバラッド：
トマス・デロニー「美しいロザモンドの死」—

國 崎 倫



Anon. *A Mournful ditty of the Lady Rosamond, King Henry the Seconds concubine* (1658-1664)
挿絵

1. はじめに

初期近代英国において、主に劇作家として活躍したシェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)が執筆に関与した戯曲は、今日では他の劇作家との共作も含めると40作品を超えると考えられている。ひとりの劇作家が生涯で執筆、または関与した作品数としては多いとみなされるであろう。しかし、史劇に関して言うと、彼は歴代のイングランド国王すべてを史劇に仕立てたわけではなく、何かしらの理由を根拠に人選を行っている。例えば、シェイクス

ピア戯曲のなかに『ヘンリー七世』という題名は無いが、『リチャード三世』のなかにヘンリー七世は登場する。同様に、戯曲『ヘンリー二世』は現存しないが、『ジョン王』においてに、ヘンリー二世の正妻エレノアと、息子ジョンや孫アーサーによる血なまぐさい王権争いは描出されている。シェイクスピアがプランタジネット朝初のイングランド国王ヘンリー二世に魅力を感じなかったのか、観客からの評価や劇場の興行収入を期待できないと判断したのか、その解明は易くないが、対フランスを意識するイングランド国内のナショナリズムが反映される社会問題を考える際、戯曲の題材として焦点を当てるにふさわしい国王の選出とその傾向を検証することは、当時の政治や世論、民衆の興味関心を探る点において意義があるだろう。

本論では、シェイクスピアの関与が疑われる戯曲『ヘンリー二世』について、その材源とみなされているトマス・デロニー作「美しいロザモンドの死」を考察し、十七世紀に描出されたヘンリー二世の人物像などの特徴を確認する。さらに、愛妾ロザモンドとの典型的物語が構築され流布する期間について、複数の印刷物と共に検証する。

2. 書籍商組合への登録と先行研究

1653年9月9日、モーズリー (Master Mosely) によってロンドン書籍商組合に『ヘンリー一世とヘンリー二世 シェイクスピアとダヴェンポートによる』と銘打たれた戯曲の原稿が持ち込まれた。この戯曲は登記簿への登録を済ませたことになっているが、テキストは現存していない。

Stationers' Register

09 September 1653

Master Mosely Entred also . . . the severall playes following . . . xx^s vj^d

...

Henry the first, & Hen: the 2^d, by Shakespeare & Davenport.

(Lost Plays Database)

これについてウィギンズ (Martin Wiggins) は、著書 *British Drama* のなかで、この戯曲の存在を示す証拠は書籍商組合への登録のみであるとし、内容はおそらく歴史劇であったと推測している。さらに執筆年代について、もしダヴェンポートが書いたと想定するならば、1623年から1634年までの期間であり、彼以外の人物によるものであれば、1600年から1642年までの間であると考えている¹。ジャンルの特定については、Lost Plays Database は、この戯曲が歴史的恋愛劇 (Historical romance) であった可能性を加えている。

モーズリーが『ヘンリー一世』と『ヘンリー二世』の登録を同時に済ませた点についても疑問が残るであろう。テイラー (Gary Taylor) は、『ヘンリー一世』と『ヘンリー二世』はまるでひとつの劇のように見えるが、ダヴェンポートが1620年代に執筆あるいは翻案したものを、モーズリーがダヴェンポートとシェイクスピアの双方に献上する形で1653年に登録した可能性を考えている。一方、ハーベッジ (Alfred Harbage) は、ヘンリー一世とヘンリー二世の在位は間にステファン王の治世を約二十年挟んでいるという史実を根拠に、本来ふたつの異なる戯曲であったものを、モーズリーが登録料の節約を試みた結果、ひとつの戯曲として登録されたものと指摘している²。上演や興行収入に関わる金銭の流れを追うことが可能となれば、さらなる詳細が明らかとなるが、それらを記録する『ヘンズロウの日記』には、『ヘンリー一世』『ヘンリー五世』『ヘンリー六世』に関する記録は残る一方、『ヘンリー二世』または『ロザモンド』というタイトルへの言及は見当たらない。1653年に書籍商組合の登記簿へ登録を済ませたテキストが現存せず、当時の上演や興行収入に関する記録などの決定的な証拠が依然として発見されていないことから、失われた戯

¹ Wiggins 267-8.

² Harbage 310-311.

曲『ヘンリー二世』の実際の内容については、研究が思うように進まないというのが現状であろう。手掛かりを得るためには、材源や翻案など、1653年の前後に印刷出版された『ヘンリー二世』に関連する周辺書物を精査するより他に手段がないのである。

3. トマス・デロニー「美しいロザモンドの死」 —邦訳と他四点のテキスト間における比較検証—

戯曲『ヘンリー二世』のテキストは現存しないが、二つの作品が材源となった可能性は認められている。その一つがデロニー (Thomas Deloney) の著書 *Strange Histories* に収められる「美しいロザモンドの死」である。1602年版と1607年版を開いたところ、エレノアに関する章 (“The imprisonment of Queene Elonor”) を確認することはできたが、ロザモンドについて物語る章は存在していなかった。そのため本論では、1612年版のテキストより “A Mourneful Dittie on the death of faire Rosamond, King Henrie the Seconds Concubine” (1612) を考察の軸として取り扱う。

この作品の形式はバラッド (小唄) である。物語の内容について、1612年に出版されたデロニーのテキストと、以下に示す四点の印刷物との比較考察を行った。

Anon. *A Mournful ditty of the Lady Rosamond* (1658-1664 : 便宜上 1658年と表記)

Anon. *A lamentable ballad of fair Rosamond* (1659)

Anon. *The Life and death of Rosamond* (1670)

Deloney, Thomas. *The life and death of fair Rosamond* (1750)

十七世紀初頭から十八世紀中頃までに出版された五種類のテキストについて、

ヴァリエント、単・複数形、句読点などを精査した結果、微差はあるものの、物語の内容は全て一致していた。先行研究は、材源を認識する一方で、その出版が継続された具体的な期間についての考察を欠いていることから、本論は、デロニーによるバラッドが少なくとも百五十年間、再販を繰り返しながら、確実に需要を得ていたことを示したい。以下に記すのがバラッド本文であり、邦訳を添える。脚注には、他の四作品に確認できる使用言語の差異を記す。

“The Deathe of Faire Rosamond”

「美しいロザモンドの死」

When as King Henrie rul'd this land,
the second of that name,
(Besides the Queene) he dearly lov'd³
a faire and princely⁴ Dame:
Most pearlesse was her beautie found,
her favour and her face:
A sweeter creature in the⁵ world,
did⁶ never Prince imbrace.

イングランド国王ヘンリー二世が
この国を治めていた頃
彼はある高貴で美しい乙女を
(正妻よりもはるかに)愛していた
乙女の容姿や顔貌において
その美しさに比類するものなどいない
この世で彼女を凌ぐ甘美な創造物を
いかなる君主が抱擁したであろうか

Her crisped Lockes, like threeds of Gold,
appear'd to each mans sight:
Her comely Eyes like orient Pearles,
did cast a heavenly light:
The Bloud within her christall Cheekes
did such a colour drive,
As though⁷ the Lilly and the Rose,
for mastership did strive. (A3)

彼女の波打つ髪房はまるで金糸のよう
誰の目をも惹きつけた
彼女の整った瞳は東洋の真珠のよう
神々しい光を放った
彼女の水晶のように艶やかな頬には
内側から透けるように血が赤みを差し
まるでユリとバラが互いの色を支配しようと
その美を競い合うかのようであった

Yea⁸ *Rosamond*, faire *Rosamond*,

ああロザモンド この世の美しいバラ

ここでは、1612年版テキストと異なる語を使用している場合、あるいは内容を新たに加筆している場合のみ記す。小／大文字、単／複数、カンマ・ピリオド・セミコロン等の差異は言及していない。検証の結果、1658年版と1670年版、1659年版と1750年版という二つの組み合わせに類似性を確認できるが、ステマの確立については別の機会に論じる。

³ loved dear (1750)

⁴ comely (1659/1750) / princely (1670)

⁵ this (1659)

⁶ Could (1750)

⁷ As if (1658/1670) / As though (1659) / As tho' (1750)

her name was called so.
 To whom Dame *Elinor* our Queene,
 was knowne a cruell⁹ foe:
 The King therefore for her defence
 against the¹⁰ furious Queene,
 At *Woodstocke* buylded such a Bower,
 the like was never seene.

彼女はそう呼ばれていた
 皇后エレノアが彼女にとって
 残忍な敵となることは明らか
 国王は怒りに満ちた正妻から
 ロザモンドを護るため
 誰も見たことがないほどの屋敷を
 ウッドストックに建てた

Most curiously that¹¹ Bower was buylt,
 of Stone and Timber strong;
 A¹² hundered and fiftie Doores,
 did to this Bower belong:
 And they so cunningly contriv'd
 with turnings round about,
 That none but with¹³ a Clew of Threed,
 could enter in or¹⁴ out.

屋敷はあらゆる手を尽くして複雑に設計された
 石と丸太で頑丈に組まれ
 百五十枚もの扉が
 この屋敷には備え付けられていた
 入り組んだ迷路があちらこちらに幾つもあり
 あまりに巧妙に造られていたので
 糸を手繰り寄せながら進まなければ
 誰一人として出入りすることは不可能だった

And¹⁵ for his Love and Ladyes sake
 that¹⁶ was so¹⁷ faire and Bright,
 The keeping of that¹⁸ Bower he gave
 unto a valiant¹⁹ Knight.
 But fortune that doth often frowne,
 where she²⁰ before did smile,
 The Kings delight, the Ladyes joy.
 full soone she did beguile.

すべてはヘンリーの大切な愛妾のため
 それほどロザモンドは美しく輝いていたのだ
 ヘンリーは屋敷の見張りを
 勇猛な騎士に託した
 しかし運命の女神は時に気難しい響め面
 ついさっきまで微笑んでいたというのに
 歓喜と至福に浸っていた国王とその恋人を
 あっというまに欺いてしまうのだから

For why, the Kinges ungracious sonne,

というのも、ああ、なんと嘆かわしいこと

⁸ Fair (1750)

⁹ mortal (1658/1670) / deadly (1659/1750)

¹⁰ this (1670)

¹¹ that (1612/1659/1750) / this (1658/1670)

¹² An (1670/1750)

¹³ without (1750)

¹⁴ and (1750)

¹⁵ Now (1750)

¹⁶ Who (1750)

¹⁷ both (1750)

¹⁸ this (1659/1750)

¹⁹ worthy (1670)

²⁰ it (1659/1750)

whome he did high advance,
Against his Father rayseed warres,
within the Realme of France: (A3)
But²¹ yet before our comely²² King
the English land forsooke,
Of *Rosamond* his Lady faire,
his fare well thus²³ he tooke.

My²⁴ *Rosamond*, my²⁵ onely Rose,
that²⁶ pleaseth best mine eye:
The fairest Rose²⁷ in all the world,
to feed my fantacie:
The flower of my affected heart,
whose sweetnesse doth excel
My royall Rose a²⁸ thousand²⁹ times,
I bid thee³⁰ now farewell.

For I must leave my fairest³¹ Flower³²,
my sweetest Rose a space,
And crosse the Seas to famous France³³,
proud Rebels to abase³⁴.
But yet³⁵ my Rose be sure thou shalt
my comming shortly see.
And in my heart while³⁶ hence I am,

ヘンリーの不実な息子は
父王より寵愛を得ていたにもかかわらず
フランス国内で反旗を翻したのだ
すぐさま立派な英国王は
イングランドを離れることになったが
彼はその前に美しいロザモンドに
このように別れを告げた

私のロザモンド、私のかげがえないバラよ
貴女ほど私の眼を歓ばせるものはない
この世の最も美しいバラよ
私の想いを満たしておくれ
わが愛する心の花よ
そなたは比類なく美しい
わが気高いバラよ、千回そう呼ぼう
もう別れを告げねばならない

貴女を暫く残していかなければならない
私の最も大切な花よ
悪名高きフランスへと海を渡り
傲慢な謀反を鎮めなければならぬ
だがロザモンドよ約束する
必ず私はすぐに戻ってくると
生きている限りこの先もずっと

²¹ And (1670)

²² gracious (1750)

²³ his last farewell (1658/1670) / his farewell this (1659) / His farewell thus (1750)

²⁴ O (1658/1670) / My (1659/1750)

²⁵ the (1658/1670) / my (1659/1750)

²⁶ Who (1750)

²⁷ flower (1659/1750)

²⁸ an (1750)

²⁹ hundred (1659/1750)

³⁰ you (1750)

³¹ famous (1658/1670) / fairest (1659/1750)

³² rose (1750)

³³ the ocean into France (1750)

³⁴ debase (1750)

³⁵ still (1750)

³⁶ when (1659/1750)

| | |
|---|---|
| <p>He bear my Rose with mee.</p> <p>When <i>Rosamond</i>, that³⁷ Lady bright³⁸, did heare the King say so, The sorrow of her greeved heart, her outward lookes did show And from her cleare and christall eyes, the teares gusht out apace, Which like the silver pearled³⁹ dew, ran downe her comely face. (A4⁴)</p> <p>Her lips like to the Corral red, did wax both wan and⁴⁰ pale, And for the sorrow she conceiv'd her vitall spirits did fayle,</p> <p>And falling downe all in a sound⁴¹ before King <i>Henries</i> face, Full oft betweene⁴² his princely armes, her corpes⁴³ did imbrace.</p> <p>And twenty times with⁴⁴ waterie eyes, he kist her tender cheekes, Untill she had received againe⁴⁵ her senses⁴⁶ milde and meeke. Why grieves my Rose my sweetest Rose?⁴⁷ (the King did ever⁴⁸ say) Because (quoth she) to bloudy warres my Lord must part⁴⁹ away.</p> | <p>貴女を心に思い抱いている</p> <p>美しい恋人ロザモンドは ヘンリーの言葉を聞くと 心の底より悲嘆が込み上げ その狼狽は目に見えて明らか 澄んだ水晶の瞳から 涙が次々と溢れ出た それはまるで白銀色の真珠のように 彼女の頬をつたい落ちるのだった</p> <p>サンゴ色をしていた彼女の両唇も 色を失い鉛色に蒼ざめてしまった あまりの悲しみに耐えきれず 生きる気力が消えゆくのを感じた</p> <p>するとヘンリーの眼前で突如 ロザモンドは意識を失い倒れたのだ 王はすぐさま威厳ある逞しい両腕で 亡骸のような彼女の身体をしっかりと受け止めた</p> <p>ヘンリーは眼に涙を溜めながら何度も ロザモンドの頬にやさしくキスをした やがて彼女は意識を取り戻し 感覚が緩やかに甦るのを覚えた 私の最も大切なロザモンド なぜ悲しむのか (王は繰り返して言った) (彼女は答えた) なぜなら私の愛する貴方が 残酷な戦へ赴かなければならないからです</p> |
|---|---|

³⁷ the (1658/1670)

³⁸ fair (1658/1670) / bright (1659/1750)

³⁹ pearly (1750)

⁴⁰ a (1658)

⁴¹ down into a swoon (1750)

⁴² within (1658/1659/1750)

⁴³ body (1658/1659/1750)

⁴⁴ with (1658/1659/1750) ※"with with" (1658) は誤植であろう。

⁴⁵ Untill he had revived again (1658/1659/1750)

⁴⁶ spirit (1750)

⁴⁷ Why grieves my rose? my sweetest rose, (1750)

⁴⁸ often (1658/1659/1750)

| | |
|--|---|
| But sith ⁵⁰ your Grace in forraigne coastes, among your foes unkind, Must ⁵¹ go to hazard life and limme, why should I stay behind? ⁵² Nay rather let me like a Page your ⁵³ Shield ⁵⁴ and Target beare, That on my breast that blow may light, which should annoy you there ⁵⁵ . | 貴方は異国の海岸で 人間の情など忘れた敵に囲まれ お命と四肢を危険に晒さなければならぬのです どうして私がおとなしく待っていられますでしょうか いいえ むしろ私は小姓のように 貴方の盾と円盾を身につけましょう そうすれば戦にて貴方を襲うはずの一撃も 私の胸に打ち下ろされることになるでしょう |
| O let me in your royall Tent, prepare your Bed at night, And with sweete Bathes refresh your Grace ⁵⁶ at your returne ⁵⁷ from fight, (A4 ^v) So I your presence may enjoy, no toyle I must ⁵⁸ refuse: But wanting you my life is death, which doth true love abuse. | ああ 貴方の戦陣の天幕で 夜になれば私は寝所を整えましょう 戦から戻られたら 心地よい湯浴みで貴方を癒して差し上げましょう 貴方さえいてくだされば私は幸せ どんな苦難も厭いません ですが貴方がいなければ私は死んでいるも同然 死とは真実の愛を蔑むものなのです |
| Content thy self, my dearest friend ⁵⁹ , thy rest at home shall bee: In Englands sweete and pleasant soyle ⁶⁰ for travaile fits not thee. Faire Ladyes brooke not ⁶¹ bloudy Warres, sweete Peace their pleasures breede, The nourisher of hearts content, which ⁶² Fancie first doth ⁶³ feede. | 安心するがよい 最愛の友よ 貴女は祖国で安息に待っていなさい イングランドには豊かで素晴らしい国土がある 貴女に困難など似つかわしくない 美しい女性が血なまぐさい戦に耐え忍ぶなどあつてはならぬ 穏やかな平和は彼女らの喜びを生むもの 心を満たす滋養であり 満ち足りた心がまず、愛に滋養を与え育むのだ |

⁴⁹ pass (1750)⁵⁰ since (1659/1750)⁵¹ Must (1659)⁵² why must I stay behind. (1750)⁵³ thy (1659/1750)⁵⁴ sword (1658/1659/1670/1750)⁵⁵ that should offend you there (1658/1659) / That shall offend my dear (1750)⁵⁶ refreshen you (1750)⁵⁷ As you return (1750)⁵⁸ will (1658/1659/1750)⁵⁹ Love (1658/1659/1750)⁶⁰ pleasing court (1750)⁶¹ no (1658/1659/1750)⁶² whose (1750)⁶³ did (1658/1659/1750)

My Rose shall rest in Woodstocke Bower,
with Musickes sweete⁶⁴ delight⁶⁵.
While I among the piercing Pikes,
against my foes do fight.
My Rose in Robes of Pearl of⁶⁶ Gold,
with Dimonds richly dight⁶⁷.
Shall daunce the Galiards of my love,
while I my foes do smite.

And you sir Thomas whom I trust,
to beare⁶⁸ my Loves defence,
Be carefull of my gallant⁶⁹ Rose,
when I am parted hence:
The Flowers of my affected heart,⁷⁰
whose sweetnesse doth excell,

My royall Rose a hundred times,
I bid thee now farewell. (B1)

And at their⁷¹ parting well they might,
in heart he grieved sore,
After that day faire *Rosamond*
the King did see no more:
For⁷² when his Grace did passe⁷³ the seas
and into France was gone.
Queen Elinor with envious heart,
to Woodstocke came anone.

私のバラはウッドストックの屋敷で過ごさない
耳に心地よい甘い調べと共に
私が敵の鋭い槍の切っ先をかわしながら
奴らを打ち倒している刹那
貴女は真珠と金糸を織り込んだ上等の上着を纏い
まばゆく輝くダイヤで身を着飾り
愛のために戦う私の立派な姿を思い描きながら踊っていなさい
その間に私が敵を薙ぎ倒してくれよう

私がここを留守にしている間
私の信頼するトマス・ボーガン卿を
愛する貴女の護衛につけておく
私の美しいバラの世話を彼に託しておく
わが愛する心の花よ
そなたは比類なく美しい

わが気高いバラよ、百回そう呼ぼう
もう別れを告げねばならない

二人は気丈に別れたが
彼は心の奥底で深く悲しんでいた
この日を最後に美しいロザモンドが
国王に再び会うことはなかった
というのもヘンリーが海を越えて
フランスへ遠征している間
激しく怒り狂った皇后エレノアが
ウッドストックの屋敷へと急いで駆けつけたのである

⁶⁴ sweetly (1659)

⁶⁵ dight (1659) / delight (1658/1670)

⁶⁶ and (1658/1659/1670/1750)

⁶⁷ richly bright (1658) / rich and bright (1750)

⁶⁸ be (1658/1659/1750)

⁶⁹ Royal (1658/1670) / gallant (1659/1750)

⁷⁰ And there withal [herewithal (1750)] he fetch [fetch'd (1750)] a sigh,
as though[as tho' (1750)] his heart would break
And Rosamond for very grief
not one plain word could speak, (1658/1659/1750)

⁷¹ the (1658/1750)

⁷² And (1670)

⁷³ had past (1658/1670) / was past (1659) / passed (1750)

| | |
|---|--|
| And fourth she cald ⁷⁴ this ⁷⁵ trustie Knight, which ⁷⁶ kept ⁷⁷ this curious Bower. Who ⁷⁸ with his ⁷⁹ Clew of twined ⁸⁰ Threed, came from that ⁸¹ famous Flower ⁸² . | 彼女はすぐさまこの忠実な騎士ボーガン脚を呼びつけた 世にも稀に見るこの迷宮を彼が管理していたのである 彼は撚り糸を手掛かりに あの名高い麗人のもとからやってきた |
| And whē that they had wounded him, the Queene his ⁸³ Threed did get. And went where Lady Rosamond ⁸⁴ was like an Angell set. | エレノアはボーガン脚を襲って手傷を負わせ 彼の持つ糸を奪い取った そして向かったのだ ロザモンドがまるで天使のように佇む場所へと |
| But when the Queene with stedfast eye, beheld ⁸⁵ her ⁸⁶ heavenly face, She was amazed in her minde, at her ⁸⁷ exceeding grace. Cast off from thee they Robes (she said) ⁸⁸ that rich and costly bee, And drink thou ⁸⁹ up this deadly draught: which I have brought for ⁹⁰ thee. | エレノアは険しい眼つきで ロザモンドの神々しい表情を睨みつけたが その美があまりにも類まれであったので 心より驚嘆した エレノアはこう言った その贅沢で豪華な上着をさっさと脱ぎなさい そしてこの毒薬を飲み干しなさい お前のために私が持ってきてあげたのだよ |
| But presently upon her knees, sweet ⁹¹ Rosamond did fall, And pardon of the Queene she crav'd | だがすぐさま美しいロザモンドは 膝間づいて首を深く垂れた 彼女はこれまでに犯した罪への赦しを |

⁷⁴ called (1658) / cal'd (1670) / calls (1659/1750)

⁷⁵ the (1750)

⁷⁶ who (1658/1670/1750) / which (1659)

⁷⁷ keep (1658) / kept (1659/1670/1750)

⁷⁸ And (1750)

⁷⁹ this (1670) / a (1750)

⁸⁰ twisted (1750)

⁸¹ the (1659) / this (1670/1750)

⁸² Flows (1658) ※“flower”の誤植

⁸³ this (1658/1670/1750) / his (1659)

⁸⁴ [Rosamond] (1750)

⁸⁵ beheld (1658/1659/1750)

⁸⁶ his (1750)

⁸⁷ such (1750)

⁸⁸ Cast of off thy Robes from thee she said (1658/1670) / Cast off from thee these Robes (she said) (1659) / Cast off, said she, these fine robes (1750)

⁸⁹ you (1750)

⁹⁰ to (1659)

⁹¹ Fair (1750)

| | |
|---|---|
| for her offences all. (B1 ^v) | エレノアに請うたのである |
| Take pittie on my youthfull yeares, (fair Rosamond did cry) And let me not with Poyson strong, inforced be to dye. ⁹² | 美しいロザモンドは泣きながら懇願した どうか私の若さを憐れんでください 劇薬を飲んで死ねだなんて どうかお許してください |
| I will renounce this sinful life, And in a ⁹³ Cloyster bide: | この罪深い人生を悔い改めます 修道院へ入り尼として暮らします |
| Or else be banisht, if you please, to range the world so wide, And for ⁹⁴ the ⁹⁵ fault which ⁹⁶ I have done, though ⁹⁷ I was forst thereto ⁹⁸ . Preserve my life and punnish me, as you thinke good ⁹⁹ to doe. | さもなければ どうかお願いします この世の果てへと私を追放してください 私が犯してしまった過ちと引き換えに たとえ私が不貞を強いられたにすぎないのだとしても どうか命だけは助けてください 罰を受けます お后様が納得なさるように |
| And with these words her lilly hands, shee wrong full often there: And downe along her lovely ¹⁰⁰ cheekes ¹⁰¹ proceeded many a teare. But nothing could this furious Queene, therewith ¹⁰² apeased ¹⁰³ bee. The cup of deadly poyson filld ¹⁰⁴ as she sat ¹⁰⁵ on her knee. | このように述べるとユリのように白い両手を 彼女はそこで何度も絞るように揉んだ すると彼女の愛らしい頬をつたって 何粒もの涙がこぼれ落ちた しかし彼女が何をしたところで 怒りに満ちた王妃を鎮めることなどできない 盃を満たすは死に至る猛毒 彼女は膝間づき地面にうなだれたままである |
| Shee gave the ¹⁰⁶ comely Dame to drinke, | エレノアが気高いロザモンドに毒を飲むよう差し出すと |

⁹² Be forced for to die (1750)

⁹³ some (1659/1750)

⁹⁴ fur (1750) ※おそらく“for”の誤植

⁹⁵ that (1658/1670) / the (1659/1750)

⁹⁶ that (1659)

⁹⁷ Tho' (1750)

⁹⁸ thereunto (1750)

⁹⁹ fit (1750)

¹⁰⁰ comely (1658/1659/1750)

¹⁰¹ face (1659/1750)

¹⁰² Herewith (1750)

¹⁰³ appealed (1658/1659) / appeased (1750)

¹⁰⁴ strong (1659/1750)

¹⁰⁵ Which she held (1750)

| | |
|--|-----------------------|
| who tooke it in ¹⁰⁷ her hand | 彼女はそれを手に取った |
| And from her bended knee arose, | それから膝を伸ばして体を持ち上げ |
| and on her feete did stand: | しっかりと立ち上がった |
| And ¹⁰⁸ casting up her eyes to heaven, | 彼女の瞳は天を仰いで |
| she did for mercie call, | 神の慈悲を乞うた |
| And drinking up the Poyson then ¹⁰⁹ , | そして毒杯を一気に飲み干すと |
| her life she lost ¹¹⁰ withall. (B2') | その命を絶えた |
| | |
| And when that Death through ¹¹¹ every lim, | 死がロザモンドの四肢を巡り |
| had done her ¹¹² greatest spight. | 彼女を蹂躙して命を奪ってしまった |
| Her chiefest foes did plaine confess ¹¹³ , | 最大の仇敵であったエレノアは率直に告白した |
| she was a glorious wight, | ロザモンドは立派な人間であったと |
| Her body then they did intombe, | それから彼女の亡骸はきちんと埋葬され |
| when life was fled away, | 魂が肉体を離れた後も |
| At Godstow ¹¹⁴ , neere ¹¹⁵ Oxford towne, | オックスフォードのグッドストウにて |
| as may be seene this day. | 今日の姿に至るのである |

4. 考察

先行研究は、デロニーによるバラッドが『ヘンリー二世』の材源であったと指摘するが³、1568年に出版されていたホリンシェット作『年代記』が、同じ内容を物語ることについては考慮しているのであろう。ただし、デロニーは、「ヘンリーには愛妾が大勢いた」(“he kept manie concubines” Holinshed 115) という記録には言及していない。既婚女性ではなく若い愛妾を貴婦人と崇めているわけであるが、一輪のバラを護るために命がけで敵を討つと誓うへ

¹⁰⁶ that (1658/1670) / this (1659/1750)

¹⁰⁷ from (1750)

¹⁰⁸ When (1750)

¹⁰⁹ strong (1658/1659/1670/1750)

¹¹⁰ She lost her life (1750)

¹¹¹ And when death thro' (1750)

¹¹² it's (1750)

¹¹³ did there confess (1659) / could but confess (1750)

¹¹⁴ Woodstock (1658/1659/1670/1750)

¹¹⁵ near to (1658/1659/1670/1750)

ンリーの姿は、中世の宮廷風恋愛、騎士道的精神を想起させる。

また、デロニーは、ロザモンドの国王に対する拒絶、名誉を奪われ家名を汚されたことへの怒りと後悔、愛妾としての運命を悲観して嘆く姿、これらすべてをバラッドから排除した。しかし、細部を読み込むと、史実を匂わせる箇所を確認できる。デロニーは、僅か一行であるが、「私は国王によって不義を強いられたにすぎません」(though I was forst thereto) というロザモンドの弁明を、命乞いの際に許したのである。

さらに、デロニーが美化に努めたのはヘンリーとロザモンドだけではない。エレノアについて、たしかに彼女は嫉妬と狂気の象徴であるが、最終スタンザにて、ロザモンドの死を見届けた後、愛妾が国王に強いられてきた人生への同情と理解を示し、名誉を世に伝えようと試みている。妾を丁重に埋葬した設定も、エレノアの気高さと気概を示そうとするデロニーなりの配慮だと言えよう。デロニーは、正妻エレノアを悪役とし、ロザモンドを悲劇のヒロインに位置づけ、構図を簡潔に整理しながらも、ヘンリーが決して理解することのできない女同士の共鳴を奏でたことにより、悲恋のさらなる美化に徹したのである。

5. 結論

失われた戯曲『ヘンリー二世』の材源であると認められるデロニー作『美しいロザモンドの死』は、十七世紀初頭から十八世紀中頃までの百五十年間、内容を変えることなく、ヘンリー二世とロザモンドの悲恋を歌う典型的物語として版を重ねていたことが明らかとなり、社会的需要を維持していたことがわかる。デロニーはバラッド執筆に際して、史実として数多語られる情報を取捨選択し、物語の構成を単純化することで勢いのあるエンターテイメントへ練り直した。悲恋の物語は、このあと十八世紀末まで続くロザモンドのアダプテーションを支える基盤として、確立されていたのである。

参考文献

- Anon. *A lamentable ballad of fair Rosamond, King Henry the Second's concubine, who was put to death by Queen Elinor, in the famous bower of Woodstock, near Oxford. To the tune of, Flying fame, &c.* London: Printed by and for W.O. 1659.
- Anon. *A Mournful ditty of the Lady Rosamond, King Henry the Seconds concubine, who was poysoned to death by Queen Elenor in Woodstocst Bower near Oxford.: To the tune of, Flying Fame., [S.l.]*: Printed for F. Coles, Tho. Vere and W. Gilbertson, 1658-1664.
- Anon. *The Life and death of Rosamond, King Henry the Second's concubine and how she was poysoned to death by Queen Elenor.* [S.l.] : Printed for F. Coles, T. Vere, and J. Wright, 1670.
- Anon. *The Unfortunate concubines: or, The history of fair Rosamond, mistress to Henry the Second, and Jane Shore, concubine to Edward the Fourth.* Place of publication not identified: Hollis, between 1700 and 1799.
- Deloney, Thomas. *Strange histories, of kings, princes, dukes earles, lords, ladies, knights, and gentlemen With the great troubles and miseries of the Dutches of Suffolke.* London: Printed by [i.e. for] William Barley, the assigne of T. M[orley], 1602.
- . *Strange histories, or Songes and sonets, of kings, princes, dukes, lordes, ladyes, knights, and gentlemen.* London: [By W. White] for W. Barley, 1607.
- . *Strange histories, or, Songs and sonnets, of kinges, princes, dukes, lords, ladyes, knights, and gentlemen and of certaine ladyes that were shepheards on Salisburie plaine.* London: Printed by R.B. for W. Barley, 1612.
- . *The life and death of fair Rosamond King Henry the Second's concubine.* London: Printed and sold in Bow-Church Yard, London, 1750.
- Harbage, Alfred. "Elizabethan-Restoration Palimpsest". *Modern Language Review* 35 (1940): 287-319.
- Henslowe, Philip. *Henslowe's Diary.* R. A. Foakes and R.T. Rickert eds. Cambridge: Cambridge University Press, 1961.
- Holinshed, Raphael. *The Third volume of Chronicles, beginning at duke William the Norman, commonlie called the Conqueror...* London: printed [by Henry Denham] in Aldersgate street at the signe of the Starre, 1586.
- Lost Play Database (https://lostplays.folger.edu/Henry_II)

Taylor, Gary. "A History of *The History of Cardenio*". *The Quest for Cardenio: Shakespeare, Fletcher, Cervantes, & the Lost Play*. David Carnegie and Gary Taylor eds. Oxford: Oxford University Press, 2012.

Wiggins, Martin. *British Drama 1533-1642: A Catalogue*, vol. VIII: 1626-1631. Oxford: Oxford University Press, 2017.